

Proceedings of the Symposium
“Carl Peter Thunberg and his Contribution to Japanese Flora”

XVth International Botanical Congress

September 1, 1993

Yokohama

Proceedings of the Symposium "Carl Peter Thunberg and his Contribution to Japanese Flora", September 1, 1993, Yokohama

Preface

During the Fifteenth International Botanical Congress in Yokohama, Japan, the entitled symposium was held to commemorate 250th anniversary of the birth of Dr. Carl Peter Thunberg. In Japan, Dr. Thunberg is known as the remarkable contributor who introduced modern natural history and medical science. His devoted effort to provide his knowledge and technique to Japanese people was highly appreciated and has its influence still now. On the other hand, he introduced Japanese nature and culture to the western world by his various publications and material thus contributing to international better understandings. It was also good fortune that the unpublished illustrations by Thunberg found in St. Petersburg are ready for publication.

Seven contributors listed below made presentations. Material collected by some speakers was exhibited to the audience. A public lecture by Dr. B. Nordenstam and Dr. H. Kanai of the same title was held in the evening.

One of our contributors, Dr. D. O. Wijnands, regretfully passed away shortly after the symposium. He will be remembered particularly for his scholarly contributions to the history of botanical science.

We are thankful to the editorial board of the Journal of Japanese Botany and Tsumura Laboratory for permitting these proceedings to be published in the Journal of Japanese Botany.

R. B. Nordenstam and H. Kanai, organizers.

List of contributors

- Jonsell B. B.: Bergius Botanical Garden, Sweden
Kanai H.: National Science Museum, Tokyo, Japan
Kimura Y.: University of Tokyo, Japan
Nordenstam R. B.: Swedish Museum of Natural History, Sweden
Ohba H.: University of Tokyo, Japan
Takahashi F.: Japanese Institute for Social Studies on Sweden, Japan
Wijnands D. O.: Botanical Gardens, Agricultural University Wageningen, The Netherlands

シンポジウム「ツェンペリー、彼の日本の植物フロラ研究への寄与」

ジョンセル B.: ツェンペリーとリンネおよびその
伝統

ツェンペリーほどリンネのやり方に忠実に従って仕事をした人はいない。彼は旅行家であり語り部であり、ウプサラ大学でリンネの占めた地位を44年間継いだ人である。博物学者として、彼は2000以上の種を記載した。その大多数は主に彼のアフリカでの採集品に基づき、セイロン、ジャワ、日本でのコレクションによるものもある。これによって彼は、リンネの分類体系が世界中の未知の地域の新たな材料に照らしても、ゆるぎのないものであることを示した。彼はその際リンネの雌雄

性による分類体系を改善することに意を注いだ。リンネの「自然分類体系」については論ずることはしなかった。分類学的研究の他に彼はウプサラに研究植物園を設立することに非常な努力を傾注した。1800年頃からその死の1828年まで、彼はウプサラ大学の教授連の中で唯一人世界的名声をもつ人だった。しかしながら藻類学の C. A. Agardh や菌学の E. Fries が、分類学の新時代をもたらして名が世界に広がるにつれて、ツェンペリーは時代おくれになり孤立して行った。

ノルデンスタム R. B.: C. P. ツェンペリーの生涯、
その旅行と科学的業績

C. P. ツェンペリー (1743-1828) は、リンネの弟子の中で最も成功した人である。彼はウプサラ大学で医学と博物学を専攻し、1770年にさらに医学を学ぶため、パリへおもむいた。ところがオランダに住む友人の影響で喜望峰へと旅立ち、そこに3年近くとどまり、それから日本へわたって16ヶ月間滞在した。南アフリカと日本での広範なコレクションは、ケープ植物誌、日本植物誌の基礎となった。彼はまた動物学とくに昆虫学その他の分野についても、知見を発表している。彼の旅行記はすぐにくつかの国で翻訳された。彼は多

作で、多数のモノグラフやレビジョンのほかに300ほどの作品があり、その多くは植物学の論文である。1784年、彼はウプサラ大学の教授に任命され、85才で死ぬまでこの地位に留まったが、その席はルドベック父子、リンネ父子が占めていたものだった。ツェンペリーは「南アフリカ植物学の父」、「日本植物学のリンネ」と呼ばれている。彼が世界の果ての日本の知識階級に与えた影響は、たまたま幕政時代の終わりにあたり、世界との文化的・科学的交流をなしとげる上に、ある種の役割を果たしたとみられる。

木村陽二郎、大場秀章：サンクトペテルブルグの
シーボルト・コレクション中に発見された、ツェン
ペリーの未公表植物図譜

ツェンペリーは *Icones Plantarum Japonicarum* (1794-1805) で、日本の植物図50点を刊行しており、この他にもいろいろな論文で多くの図を公表している。最近になってサンクトペテルブルグのロシア科学アカデミー図書館所蔵のシーボルト・コレクション中に、ツェンペリーによって用意された305点の日本植物の図が発見された。これらの図は“*Icones*”と同じスタイルで描かれているが、

これ迄刊行されていなかったものである。マキシモウイチはこれらの図を製本し、“*Icones Plantarum Japonicarum (ineditae)*”と名付け、植物名索引を付けている。これらの図は明らかにおしほ標本から描かれたもので、おそらく刊行された“*Icones*”に続くものとして準備されたものだろう。講演では図譜の特色や生品との比較について言及した。

ウィナズ D.O.: ツェンベリーとオランダ、彼の旅行の背景と影響

ツェンベリーはオランダ東インド会社に勤務中、アフリカ・アジアで7年を過ごした。この時代は学術協会が発展した時期で、1752年オランダ科学協会が欧州低地地方の国としては初めて設立され、これに続いて多くの協会が作られるようになったが、たいていはアマチュア同好会であり、専門科

金井弘夫：ツェンベリーと日本のアマチュア植物学

ツェンベリーは日本滞在中、多くの本草医と会い、彼の斬新な科学知識と最近の植物学に基づく植物のラテン名を伝授した。これらの本草医は、各自が国中から来る弟子を抱える身であったので、彼によって紹介された知識はやがて一般に広まっ

高橋 文：ツェンベリーの日本医療への貢献

1775年にツェンベリーが来日する前年に、ヨーロッパ医学書の最初の和訳本、解体新書が刊行され、西洋医学についての人々の関心はきわめて高まっていた。医学と博物学に長い研鑽を積んだツェンベリーがこの時期に来日し、我が国の医師や通詞と親しく交流して医学を教えたことは、日本にとって大変幸運だった。ツェンベリーは日本のモグサや、江戸で解毒薬として入手した馬の胃結石(ベズアル石)について紹介している。一方、あ

学者による学会はまだ少なかった。ツェンベリーはオランダの五つの協会の会員になった。この講演ではツェンベリーとオランダの関わりについて論じ、彼が会員であったことによって、互いにどのような影響があったかも検討した。

ていった。今日では日本中に250を越えるアマチュアによる植物同好会や自然観察会があり、それらの活動を紹介した。また伊藤篤太郎氏の遺品中からみつかった、伊藤圭介がシーボルトに植物名を質問した標本について、感想をのべた。

る通詞はその著書で、性病の治療法としてのフェン・スウィーテン水療法をツェンベリーから教わったと述べている。昇汞を主成分とするこの処方、ヨーロッパでは1754年に公表され、1930年代まで多くの国の薬局方に名を留めていたものである。この療法がヨーロッパに導入されてわずか20年後に、ツェンベリーがその適切な用法を日本人に教えたことは、評価されるべきものであろう。